

専攻科福祉専攻修士論文発表会における外部発表に関する報告

Report on Presentations by Guest Speakers at Thesis Presentation of Graduate Course Welfare Specialty

武田 千幸 安永 龍子
TAKEDA Chiyuki YASUNAGA Ryuko

キーワード：専攻科福祉専攻，報告会，修士生，卒後教育，介護施設，障害者支援施設
Key Words：Graduate Course Welfare Specialty, Presentation of Case Study, Finished Trainee, Postgraduate Education, Caringfacility, Institutions for People with Disabilities

1. はじめに

奈良佐保短期大学専攻科福祉専攻（以下専攻科とする）は、保育士養成施設で保育士資格を取得した者が1年間で介護福祉士資格を取得できるコースとして、平成15年度から27年度の13年間にわたり、188名の介護福祉士を養成してきた。専攻科では平成20年度から27年度の8年間、学生の修士論文発表会の場において、専攻科修士生（以下修士生とする）や介護施設職員等に演題を募集し発表する外部発表の場を設けた。8年間で合計69件の発表が行われ、本文ではその内容をまとめ、振り返ることとする。

2. 専攻科 修士論文発表会

2-1 概要

専攻科では保育士資格取得段階での学びを活かし1年間で介護福祉士資格の取得をめざすため、カリキュラムが密に組まれている。第1段階から第3段階まで、1年間に3度の施設実習を行うこととなる。専攻科学生は1月から2月上旬にかけての4週間（平成25年度以降は11月から12月上旬にかけての4週間）、最終段階である第3段階介護実習を特別養護老人ホームや介護老人保健施設、障害者支援施設で行う。第3段階実習では「施設プログラムに参加し、サービス全般の理解ならびに計画的な個別介護過程の展開を通して、利用者のニーズ把握の必要性と生活の質の向上について学ぶ。自立支援と共感的受容の態度を学ぶ」という到達目標のもと、1人の利用者を担当し介護過程の展開を行うことを課題としている。実習中、学生は施設全体の介護の流れの中、1人の利用者に時間をかけて関わり、情報収集からアセスメントを行い、利用者の生活上のニーズを導き出す。そしてニーズをもとに介護計画を立案し実施する。介護過程の展開においては、施設実習指導者をはじめ現場の介護者や他職種の職員、巡回担当教員より指導を受け、十分にアセスメントを行ったうえでの立案、実施となる。学生は実習期間内に介護計画実施までを求められるため、多くのプレッシャーを感じながら実践することとなる。実施だけにとどまらず実施したことを評価し、再アセスメントに至ることが望ましいが4週間という限られた時間の中では学生全員がそこまで達することは難しい状況である。学生は実践を通して利用者や実習指導者から多くの学びを得て、実習最終日を迎える。その後、各自が関わった利用者の事例、実施してきた介護計画を振り返り、論文にまとめることで学びを追求する。担当利用者のADL状況、アセスメント、介護計画、実施内容、考察という構成で論文を作成する。作成期間は実習終了後から2月後半にかけての2、3週間と短い期間であり、集中的に論文執筆にあたる。執筆に際しては巡回担当教員を中心とし、複数の教員から指導を受ける。複数の教員から指導を受けることは、様々な視点から助言を受けることになる。学生は実習内容や介護過程の展開について、さらに事例からの学びについて深く振り返ることにつながる。平成25年度以降は実習時期が1月から11月へと変更になり、実習終了後は通常の授業を受けながら、執筆にあたった。集

中的に行うことができないため、論文執筆期間は1ヵ月程度と長くなり、授業時間も活用しながらの執筆となった。指導の方法は以前と変わらず、複数の教員によって指導を行うシステムを続けた。そのシステムは、介護福祉士、社会福祉士、看護師等保有資格が異なる教員間においては、他職種の専門性をあらためて知ることにつながり、各自の専門職としての役割を再認識することへとつながった。また学生への論文執筆指導を共に行う上で、論文執筆に関する知識や考え方ははじめとして、介護や福祉に対する考え方、利用者への向き合い方など、教員自身がお互いに刺激し合える環境となり、教員間にとっても学びの深いものとなった。

修了論文発表会での発表は、発表7分、質疑応答3分の計10分で構成した。修了論文はA4用紙6枚にまとめ、それをもとに発表のための原稿作成、発表の練習を経て発表会当日を迎える。平成19年度頃よりパワーポイントを使用しているプレゼンテーションを行うようになり、発表に効果的なパワーポイントを作成するという課題も追加されるようになった。当日の司会、会場係、受付等役割については専攻科学生が行い、次年度専攻科入学予定者も一部担当した。

修了論文発表会の後には懇親会を行い、専攻科学生、次年度入学予定者、教職員、修了生、実習施設の指導者などが出席し、意見交換を行った。

2-2 外部発表者の発表導入に至った経緯

専攻科創設時より修了論文発表会を毎年開催し、学生の発表のみで会を進行してきたが、修了生が就職している実習施設の指導者から「修了生が外部研修会で発表した演題があり、それを在學生や修了生、卒業生にもぜひ聞いてほしい。そのような場はないものだろうか」という提案があった。外部者の発表の場を設けることが介護福祉士の研修の場、現場介護者の研鑽の場、修了生の卒後教育の場となり、介護の仕事についての魅力ややりがいを語り合う機会となるのではないかと期待し、企画を行い、外部発表の枠を設けることにした。

まずは本学が位置する奈良市、近隣の天理市、大和郡山市内の特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、グループホームと実習施設約130件に演題募集要項を発送した。演題募集は毎年11月から12月にかけて1ヵ月間程度で行った。初年度は、外部発表の場を設けるきっかけとなった演題を含む3題の発表が修了生により行われた。

2年目からは修了生に限らず、外部施設の発表が徐々に増え始めた。発表申し込みがあった施設とはメールや電話で連絡を取り、報告会当日に備え連携をはかるようにした。

平成21年度からは外部発表者にA4用紙1枚程度の抄録の提出を依頼し、学生の修了論文集に掲載することにした。発表は質疑応答を含めて15分で依頼した。

2-3 外部発表実施の具体的内容

外部発表数の推移は表1に示す通りである。以下に外部発表の具体的内容等について述べる。

表1 外部発表数の推移

年度	20	21	22	23	24	25	26	27	合計
外部発表数	3	7	8	5	12	11	12	12	69
修了生・卒業生 発表数(再掲)	3	6	5	2	8	6	6	9	45

(1) 平成20年度(第1回)

初年度は外部施設からのエントリーがなく、外部発表の場を設けるきっかけとなった演題以外に、2名の修了生に発表を依頼した。1名は実習先でもある施設に就職している修了生であり、施設との連携をはかりながら発表に繋げた。初年度であり、体制が整っていなかったことから外部発表者の資料は学生の論文集とは別刷りとし、当日配布した。老人保健施設入所中の認知症高齢者へのケアについてまとめた事例、就職して1年目の介護職員が初めて看取りを行った事例、就職して5年目の介護職員が

職場環境についてアンケート調査を行った事例が発表された。

(2) 平成 21 年度 (第 2 回)

2 年目となり、7 つの演題がエントリーされた。修了生 6 題、外部施設職員 1 題であった。第 1 回目の発表者 3 名のうち 2 名は連続しての発表となった。1 名については、発表者は違うが同じ施設に就職した修了生の発表であった。初回に発表した修了生の同期修了生の発表に結びついた例が 2 件あった。(1 期生 1 名、5 期生 1 名) このことは修了生同士のモチベーションを高め合うことにつながったと考える。さらに、修了論文発表会の場が修了生同士の同窓会を兼ねての情報交換の場、母校を訪れるきっかけとなり始めたのではないかと考える。

発表内容は排泄介助やユニットケアに関する取り組みなど、日ごろの実践を取りまとめた事例、職場環境について考察した事例、介護職員として働いた期間を振り返った事例等であった。この年から、外部発表者の抄録を学生の修了論文集と一緒に掲載することとし、一つの会としての資料としてまとめることができた。

(3) 平成 22 年度 (第 3 回)

外部発表 8 題中、修了生 4 題、生活福祉コース卒業生 1 題、外部施設職員 3 題の発表となった。外部施設職員発表のうち 1 題は訪問介護実習先の管理者に発表を依頼した。専攻科だけでなく介護福祉士を養成している生活福祉コースの卒業生からの発表もあった。生活福祉コースは学生数が多く、時間的な余裕がなく事例研究発表の場に外部発表の枠を設けることができなかった。専攻科の修了論文発表会が学科コース関係なく卒業生や修了生が意見交換できる場となってきた。

発表内容は老人保健施設での在宅復帰に向けた取り組みをまとめた事例や看取りを行った事例、バリテーションの活用事例、訪問介護事業所運営に関する事例等であった。

(4) 平成 23 年度 (第 4 回)

外部発表 5 題中修了生 1 題、生活福祉コース卒業生 1 題、外部施設職員 3 題であった。ユニット型特養での食事ケアに関する取り組み、老人保健施設での胃ろう造設の利用者の経口摂取に向けた取り組み等が発表された。胃ろうを造設したからといって、経口摂取をあきらめることなくチームで取り組み、食べるのが好きな利用者の思いをくみ取った事例が発表された。奈良県外にある実習先からの発表もあった。

(5) 平成 24 年度 (第 5 回)

外部発表が初めて 10 題を超えるエントリー数となった。12 題中修了生 4 題、生活福祉コース卒業生 2 題、修了生と生活福祉コース卒業生の合同発表 1 題、生活福祉コース卒業生が就職先施設職員と合同での発表 1 題、外部施設職員 4 題であった。平成 24 年度は専攻科の学生数が少なかったため、学生の発表終了後、午前に 2 題、その後午後から 10 題発表することとなった。専攻科の学生数減少の中、外部発表者の数が増えたことで、論文発表会として成立していた。外部発表者の所属としてそれまでは特別養護老人ホーム、老人保健施設が多くを占めていたが、重症心身障害児者施設やグループホームなど多岐にわたった。また、富山型デイサービスに就職した修了生から、富山型デイサービスの実際の様子や取り組み内容についての発表があった。

発表内容はチームケアに関するものや口腔ケア、食事介助等日々の実践報告、OJT に取り組んだ報告等であった。

(6) 平成 25 年度 (第 6 回)

外部発表 11 題中、修了生 3 題、生活福祉コース卒業生 2 題、修了生と生活福祉コース卒業生の合同発表 1 題、外部施設職員 6 題であった。外部施設職員による報告数の割合が高くなった回であった。外部施設職員の発表数が増え、本学とつながりのある介護施設が増えることになり、修了論文発表会が本学関係者のみの会ではな

くなってきたといえる。介護福祉士養成校として地域とつながるきっかけを作ることができてきたのではないかと考える。

発表内容はデイサービスでのレクリエーションに関する報告、高齢者夫婦世帯の在宅介護に関する実践報告、老人保健施設での排泄介助の統一化を図った事例、介護福祉士として目標を持って介護することの大切さを述べた発表等であった。

(7) 平成 26 年度 (第 7 回)

外部発表 12 題中、修了生 3 題、生活福祉コース卒業生 1 題、生活福祉コース卒業生が就職先施設職員と合同での発表 1 題、幼児教育科 (現・地域こども学科) 卒業生 1 題、外部施設職員 6 題であり初めて幼児教育科の卒業生からの発表があった。卒業生は保育士資格を活かして障害者支援施設で勤務しており、施設での利用者との関わりについて発表した。そのほかにも前年度に引き続いた形でのデイサービスにおけるレクリエーションに関する報告や、グループホームでの地域に向けた取り組み、日ごろ介護を行っていて感じたことを取りまとめた発表等があった。

(8) 平成 27 年度 (第 8 回)

外部発表 12 題中、修了生 5 題、生活福祉コース卒業生 2 題、生活福祉コース卒業生が就職先施設職員と合同での発表 1 題、食物栄養コース卒業生 1 題、外部施設職員 3 題であり、初めて食物栄養コースの卒業生からの発表があった。この回をもってビジネスキャリアコースを除く本学すべての学科コースの卒業生からの発表が行われた。食物栄養コースの卒業生は栄養士資格を活かして障害者デイサービスで勤務しており、利用者との日々の関わりについて発表した。また、第 7 回までは高齢者施設で勤務する職員からの発表が多くを占めていたが、障害児者支援施設の職員からの発表が 12 題中 3 題あった。高齢者施設 (特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、グループホーム) からの発表ばかりでなく、障害者支援施設の職員からの発表も増えてきており、幅広く様々な種別の施設からの発表を聞く機会になってきた。発表内容は、重症心身障害児者施設において限られた生活空間の中でいかに生活の幅を広げる介護が行えるのか考察した事例や、自閉症利用者との日々のかかわりについての報告、発達障害児への療育に関する報告等が行われた。

このように、全ての回を通して外部発表者の発表内容は、専門職としての自分自身の振り返りやチームとして取り組んだ事例の報告、日頃の介護の実践報告等多岐にわたっている。パワーポイントや動画などを駆使したプレゼンテーション (図 1) により、今後介護について学んでいく次年度入学予定者にも、目に見えてわかりやすい発表が年々多くなってきた。言葉では伝えきれない部分が、画像や動画を取り入れることによって、よりわかりやすく発表されるようになった。(これまでの演題と発表者の所属施設種別は巻末の付表 1 を参照)



図 1 発表の様子

3. 専攻科 修了論文発表会における外部発表開催の意義

外部発表の場を設ける以前から、学生が第 3 段階実習を行った実習施設の指導者や職員には、発表会への参加と学生発表後の講評を依頼していた。全ての実習施設とはいか

ないが、毎年数施設より実習指導者が発表会に参加する仕組みは整ってきていた。実習を終えてからの学生の振り返りを、実習中に関わった指導者や職員が聞くことは、学生にとっては嬉しいことであり、指導者や施設職員にとっても自分自身の実習生指導の振り返りの機会ともなっていた。また、発表会には次年度専攻科入学予定者にも参加を促し、次年度からの介護に関する学びの入口として、発表を聞かせるようにしていた。修了生、学内教職員も学生の学びの成果を聞くために参加していた。そのような機会に、実際に現場で働いている修了生や介護現場の職員からの実践報告が行われることで、学生にとっては4月からの自分たちの姿をイメージすることにつながり、介護に対する期待や希望を持つことができ、また、専門職として就職してからも研究を行い続けることが大切であると感じることができたと考える。次年度入学予定者にとっては介護現場で実際に行われていることの理解につながり、学内教職員にとっては修了生や卒業生の成長した姿を目の当たりにし、喜びを感じることもできる場であった。修了生や卒業生にとっては自らが学んだ懐かしい場所で、現在の自分自身の取組みを発表することができ、参加者からの質疑応答に答えることでさらなる学びにつながった。外部発表者や介護施設の職員についても、施設の介護の取組みを振り返る機会となり、他者の発表を聞くことで新たな発見にもつながり、他の施設の発表者とのつながりを形成する機会となった。また、勤務する施設について広く知ってもらう機会ともなり、求人募集にもつながった。様々な面から、外部発表の場を設けることの意義を感じることも出来た(表2)。

表2 外部発表開催の意義

<p>外部発表者、修了生にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> 介護施設職員同士の情報交換の場となった 発表者自身が、自らの介護を振り返る機会となった 学生の発表を聞くことで、学生が介護についてどのように考えているのかの理解につながった 施設の広報を行う場になった 新人職員の発掘の場となった 施設と介護福祉士養成校とを繋ぐ場となった 情報収集の場となった 発表することで、プレゼンテーション能力の向上につながった 卒後教育の一環となった
<p>学生、次年度入学予定者にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分自身の将来像を修了生や介護職員に重ね合わせられる機会となった 情報収集の場となった 現場職員の実践例を聞くことで学びにつながった 外部施設職員との交流の場となった 研究し続けることの意味を理解することにつながった 就職先を考える場となった 介護観を確立する場となった 介護についてのイメージをする場となった
<p>介護福祉士養成校として</p> <ul style="list-style-type: none"> 修了生、卒業生への卒後教育の一環となった 現場での実践例を学生が聞く機会を設けることができた 介護施設と養成校を繋ぐ場となった 介護福祉士の資質向上につながる仕組みを提供することができた

4. 今後について

年々外部発表の機会が周知され、毎年定期的に発表する修了生や卒業生、施設職員が増えてきた。8年間の実施中4回の発表が最多であり、この機会を待っていているようになった。発表を考えてはいるが当日の参加が困難であったり、準備期間が足りないことで発表に至らない場合があっても、次年度に発表するというケースも出てきた。毎年恒例の行事として位置づけられてきた結果であるといえる。また、外部発表の様子を目の当たり

にし、次年度もと意気込んでくれる発表者もいた。

専攻科は、1年間という短い期間に介護福祉士資格を取得するための講義、演習、実習を行う必要があり「医療的ケア」を可能にする法改正^{注1)}がなされたことで学修に必要な時間数が増え、1年間では教育課程を編成することが難しくなったことと、スケジュールが過密になることで専攻科が目指してきた「質の高い介護福祉士を養成すること」が難しくなると考えたことから、平成28年3月をもって廃止することとなった。奈良佐保短期大学では今後は2年制の生活福祉コースに統一して介護福祉士養成を行うこととなり、修了論文発表会における外部発表の事業に関しても生活福祉コースが引き継いで行っていくこととなった。8年間築き上げてきた外部発表会が専攻科の廃止と共に終了することにならず、施設職員や修了生からは安堵の言葉をもらった。この安堵の言葉が、この場を設けてきた意義そのものであり、発表数が年々増加傾向にあることから、外部発表会開催の意義は大きいものであると考えられる。

現在は生活福祉コースの学生数も以前より少なくなっていることから、今後も学生の発表の後に外部発表の枠を設けることとなった。しかし今後事業を引き継いで行っていく上で現在までの募集方法、実施方法でよいのかということを始め、様々なことを検討していく必要がある。学生発表とは別の日に発表会を設けることも必要なのかも知れない。学生数をもとに考えているが、演題募集発送先の見直しを行い、外部発表の枠を広げることにより、別の日に設けることも考えていく必要がある。実施場所についても、今までは学内で行ってきたが、学外に出て別会場で行うことも検討に入れることが必要なのではないだろうか。学外で発表会を行うことで、さらに多くの方の目に触れ、介護の啓発活動にもつながる。そのようななると養成校独自の事業から一歩進めて、介護福祉士会等と連携して会を実施していく必要も将来的にはあるのではないかと考える。今までの実施内容を振り返り、さらに展開していくことを介護福祉士養成校として目指していく必要がある。

5. おわりに

8年間実施してきた外部発表について振り返ることにより、開催してきたことの意義が大きかったと捉えながらも、さらに発展させていくためにはどのような取り組みが必要なのかを考えていく機会となった。現状で満足するのではなく、介護の意味、そして現場で取り組んでいる事例、介護職員の日頃の努力をどのように世間に周知していくのか、介護福祉士養成校としての使命を果たすべく発表会の開催と、さらに展開するための検討を続けていきたい。

注釈

注1) 社会福祉士及び介護福祉士法改正により、平成27年度以降は介護福祉士がその業務として喀痰吸引等を実施できるようになった。そのため養成課程においても「医療的ケア(喀痰吸引等)」50時間のカリキュラムが新たに加えられ、専攻科での1年間の授業時間数が1,155時間から1,205時間となった。

付表1 専攻科修士論文発表会時の外部発表演題一覧

年度	発表演題	発表者所属施設種別
20	介護放棄によって受傷した認知症高齢者へのケア —心身の状態の改善を目指して—	介護老人保健施設
	はじめての看取り—その中から見えた日々の大切さ—	特別養護老人ホーム
	働きたい、やりがいを感じる施設と現状の職場について —家族をあずけたい、自分も入りたいと思える施設とは—	有料老人ホーム
21	排泄に関する取り組み	特別養護老人ホーム
	ユニットケア実践報告—1人の入居者様との関わりを通して—	特別養護老人ホーム
	新法に沿った施設へのプロローグ —障がい者と支援者の共存をかけた措置から支援費へそして自立支援法へ—	障害者支援施設
	指摘・指導は天の声 —自分自身を見直すチャンス—	介護老人保健施設
	「食」の充実で生活は楽しくなる	特別養護老人ホーム
	介護職におけるキャリアデザイン —より専門性を高め自分の将来を考える—	有料老人ホーム
	介護福祉士 —6年間を振り返って—	介護老人保健施設
22	個別ケアにおける情報共有の重要性—Mさんノートを活用して—	介護老人保健施設
	転倒リスクのある利用者様の在宅復帰を目指して —居室変更を行うことで、自立に向かった事例—	介護老人保健施設
	5年間 介護を通じて学んだ事	特別養護老人ホーム
	口腔リハビリの効果	特別養護老人ホーム
	多職種連携によるユニット型特養における看取りケア	特別養護老人ホーム
	透析高齢者へのケアの実際	介護老人保健施設
	喪失による混乱期のニーズ抽出を試みて —バリデーシヨンの活用事例から—	介護老人保健施設
	今後の介護事業を支える	訪問介護事業所
23	主体的な生活支援への取り組み～食事ケアの取り組みを通して～	特別養護老人ホーム
	笑顔であいさつ	介護老人保健施設
	「人とヒトのつながり」	介護老人保健施設
	在宅サービス支援とは	特別養護老人ホーム
	排泄ケア～高秀苑での取り組み～	特別養護老人ホーム
24	大家族～みんな集まれ、このゆびとーまれ～	デイサービス
	筋ジストロフィー患者の個々に合わせたライフスタイルと長期入院の工夫について	病院
	チームケア～高秀苑3階北ユニットでの取り組み～	特別養護老人ホーム
	変わらないもの	介護老人保健施設
	看取り委員会設立について	特別養護老人ホーム
	その方らしい生活を目指して	特別養護老人ホーム
	気持ち良い歯磨きを目指して	特別養護老人ホーム
	安全な食事介助をめざして～食事姿勢を整え誤嚥を防止する～	介護老人保健施設
	園芸に触れて～馴染みの物を取り入れて～	グループホーム
	特別養護老人ホーム 大和園平和に於ける活動内容	特別養護老人ホーム
	利用者体験～サービスの質の向上を目指して～	特別養護老人ホーム
	未来ある若者たちが成長できる介護現場であるために！ ～チャレンジ！現場スタッフのOJT（教育）にITを導入～	有料老人ホーム

年度	発表演題	発表者所属施設種別
25	最高の瞬間～家族とおなじだけの愛情のなかで～	デイサービス
	延寿いきいき倶楽部創設と活動についての中間報告	デイサービス
	フレンド花壇を通しての地域への取り組み	グループホーム デイサービス
	現場での事例検討を通して —その人らしく過ごして頂くために—	デイサービス
	「やっぱりおかたにのヘルパーがいい！ ALSの妻と要介護者の夫の在宅生活を支えて」	訪問介護事業所
	「つぶやきの声をかたちに」 ～地域に飛び出そう！葛城花火大会に行こう！～	介護老人保健施設
	排泄技術の統一化を図る —オムツに関する改善の取り組み—	介護老人保健施設
	目標をもつことの大切さ	特別養護老人ホーム
	パーソン・センタード・ケアの価値基盤で対話し、可能性を引き出せる人へ	特別養護老人ホーム
	平成25年度取り組みとコミュニケーション	特別養護老人ホーム
その人らしさを追求した、生活を戻す	特別養護老人ホーム	
26	居場所～1人ひとりの想いがつまった空間～	デイサービス
	延寿いきいき倶楽部と延寿式脳トレーニングの中間報告	デイサービス
	お年寄りの思い	特別養護老人ホーム
	少人数による音楽レクリエーション ～胃瘻造設者との関わりについて～	特別養護老人ホーム
	「家族のような安心できる支援」	障害者デイサービス
	障害者の地域生活を支えるために～相談支援事業所の役割と課題～	訪問介護事業所
	バルツァ・ゴードルにおける生活支援の取り組み	重症心身障害児学園・ 病院
	腰痛よ、さようなら	デイケア
	介護という仕事について感じた事	特別養護老人ホーム
	実習支援プログラムの開発に向けた現状調査	特別養護老人ホーム
	地域子ども見守りボランティアと防災活動 ～認知症高齢者と地域住民による地域課題への取り組み～	グループホーム
食事環境改善への取り組み～気づきノートを活用して～	介護老人保健施設	
27	富山型デイサービス～このゆびと一まれ～	デイサービス
	みんなで笑って楽しくアンチエイジング ～延寿いきいき倶楽部が挑んだ1000日間～	デイサービス
	生きる意欲を取り戻す ～進行性疾患があっても、心穏やかな日々を共に目指す～	グループホーム
	「今私が思うこと。取り組んでいること。」	介護老人保健施設
	ご利用者との関わりをもっと増やしたい！！ ～その人らしい姿を目指して～	介護老人保健施設
	“生活の場に繋ぐ家族支援” ～家に連れて帰りたい想いにアプローチ～	介護老人保健施設
	新しいパソコン機器の可能性について	特別養護老人ホーム
	認知症カフェへの取り組み	特別養護老人ホーム
	医療・リハビリからの取組み ～健康長寿社会を支える歯科衛生士を目指して～	特別養護老人ホーム
	限られた空間の中で生活の幅を広げる	医療型障害児入所施設
	奮闘記～Uさんと私の1460日～	障害者デイサービス
	発達障がい児と療育の可能性	児童発達支援 放課後等デイサービス 事業所